

古木考

佐藤 保

はじめに

隋王朝の末期、天下の人心はすでに奢侈荒淫の煬帝の政治を見限って各地に反乱が発生しはじめたころ、太原留守の李淵もまた時の流れに乗じて起義の兵を挙げた。大業十三年（六一七）の夏五月のことである。この挙兵にあたっては、かれの第二子李世民のつよい進言があったと、兩唐書などの史書は伝えている。後の太宗である李世民はこの時わずか十八歳の若さであったが、時として逡巡し行動のにぶりがちな父を励まし諫めつつ軍を進め、秋九月には潼関に入って隋都長安をめざした。その時の李世民の作と推定されている五言古詩の「潼関に入る」⁽¹⁾（入潼關）一首が、いまに残されている。

嶠函稱地險	襟帶壯兩京	嶠・函	地險を称せられ	襟帶して兩京を壮んにす
霜峰直臨道	冰河曲繞城	霜峰	直として道に臨み	冰河 曲がりて城を繞る
古木參差影	寒猿斷續聲	古木	參差たる影	寒猿 断続の聲
冠蓋往來合	風塵朝夕驚	冠蓋	往來して合まり	風塵 朝夕に驚つ ^た
高談先馬度	偽曉預雞鳴	高談	先ず馬は度り ^{わた}	偽曉 預め雞は鳴く

棄繻懷遠志 封泥負壯情 繻を棄てて遠志を懐き 泥もて封せんと壯情を負う

別有眞人氣 安知名不名 別に真人の氣有り 安んぞ知らん 名をなす名をなさざるを

入潼關 (00020)

一読して明らかかなように、この詩に詠じられている関は実は潼関ではなく、函谷関である。それは、詩の第一聯、および後半に用いられている典故がすべて函谷関に因むものであることから理解できる。第一聯の「崤函」は崤山と函谷関。崤・函は古くから險阻の地と人びとに称揚されていて、長安と洛陽の二つの都は崤・函が襟や帯のごとくよりそって壮大な都となっている、というのが第一聯の意味。後半の典故は即ち、「高談」の一聯が、白馬非馬論で知られる公孫龍と「雞のそら音」で名高い孟嘗君の、ともに戦国期のふたりが函谷関をこえた故事。「棄繻」の一聯はやはり函谷関にかかわる漢の終軍と王元のエピソード。そして最終聯の「真人」が青牛の背にのって函谷関を出たと伝えられている老子をさすことは言うまでもない。以上のような理由から、この詩の題には疑問があり、従って制作の時期および動機にも問題が生じてくるのであるが、いまそのことはしばらくおくとして、注目すべきは第三聯の「古木 参差たる影 / 寒猿 断続の声」の二句である。

大小ふぞろいの年経た木々がたち並び、さむぎむとした猿の声が断続的に聞こえてくる——いかにも年ふりさびた古関のたたずまいを描写して、イメージのあざやかさ、音調のひびきの美しさ等いささかも間然するところがない。この一聯中、「寒猿」のイメージの伝えるものは、人里猿く離れた深山幽谷の状景とさむぎむとした秋もしくは冬の季節感である。一方、たち並ぶ「古木」のイメージもまた、この関が殷賑の人境とは異なった辺陬の地理的環境にあること、従って、蕭条たる寂寥感を示しているのであるが、それにもまして重要なことは、そのような寂寥にたえて生長してきた、古色蒼然たる樹木の暗示する経過した時間の長さである。同時にそれは、樹木とともに存在してきた関の古さを示

しているのにほかならない。

つづく第四聯では、関のある場所が人里離れた險阻な山道であるにもかかわらず、「冠蓋」つまりは使者の役人たちが一日中ひきもきらず行きかう要路であることが詠じられているが、そのような状況が実ははるか昔からそうであったこと、さらにまた、そこからの自然な連想として第五聯以下にうたわれている古人への追慕は、いずれも「古木」のイメージによって支えられた古関のイメージが喚起する非現実の想念である。

このように見てくると、「古木」という言葉は、詩の前半の現実世界と後半の想念の世界とを結びつける重要なはたらきをしていることに気付き、一見さほど重要語とも見えない「古木」が、にわかキー・ワード的な様相を帯びてくる。少なくとも、古関には「古木」のイメージがいかにも似つかわしい。

そう言えば、太宗李世民の宰相をつとめるなど、かれと関係の深かった魏徴の詩にも「古木」が出てくる。

古木鳴寒鳥 空山啼夜猿 古木に寒鳥鳴き 空山に夜猿啼く

李攀龍の『唐詩選』に収められるなど比較的よく知られた「述懐」(02442)中の一聯であるが、詩題を「出關」とするテキストが存在するように、この「古木」もやはり古関と関係が深い。ここでうたわれている状景は、さきの李世民の詩とよく似ており、関も同じ函谷関とするのが最も穏当な解釈と思われるが、しかし潼関である可能性も完全には否定できない。だが、函谷関であれ潼関であれ、中国史上、最も古くから知られている関に違いはなく、長い年月を経た古関と、古関の歴史を見つづけてきたであろう古木の結びつきは、イメージ・連想の上からきわめて自然であり、親密度が高い。

しかし、同じ「古木」でありながら、李世民のそれと魏徴の場合とは、重なる部分がより大きいものの、いささか異なる印象を与える部分もある。たとえば、李世民の詩でイメージされる古木は険しい山の寂寥感もさることながら、

亭々とたち並ぶ木影から幽邃さと人知れず流れた時の重みを感じとれるのに対し、かたや魏徴のそれは、「寒鳥」「夜猿」のイメージにも影響されて、むしろ荒涼たるものさびしさ、さらには肅然と身のひきしまる悲愴感をよりつよくさそう古木である。「中原に還た鹿を逐い／筆を投じて戎軒を事とす」とうたい出す「述懐」の制作年と動機については議論がないわけではないが、⁽³⁾伝記的に見ても中年過ぎに王朝交代という歴史の転換期に遭遇した魏徴の、新しい政権に自分の運命を賭けて出関東征する不安の心情が、荒涼たる古木のイメージに重なるのである。

このように、「古木」のイメージには、悠久の時間、繁華から遠ざかった辺鄙・幽邃のおもむき、荒涼・寂寥の感覚、あるいは寒冷の季節感等々、さまざまな意味が内包されるのであるが、中国の古典詩がいつころからどのような形で「古木」のイメージを獲得してきたのか、また「古木」とよく似る「古樹」「老木」「老樹」のイメージについてはどうか、などの問題を考察するのが本論の目的である。調査の範囲は、中国古典詩の中でも主として唐詩までの限られた範囲であり、唐詩に關してもまだ完全に全体をカバーするまでの調査はすんでいない。しかしながら、主要詩人の作品はほぼ調査済みであるので、問題に対する一応の解答を得ることができであろう。

一

まず、「古木」「古樹」「老木」「老樹」の四語が『詩経』から唐詩までの作品中に用いられている統計的な状況については、本論文末に付す「古木調査表」(以下「調査表」)を参照されたい。そのために、最初に「調査表」に關して必要なことから述べておこう。

「調査表」は、大きく二つの部分に分かれる。

(一) 「索引類」は、一九八八年末までの時点で公刊されている詩の索引・引得類にもとづく部分で、すべて一字によ

る検索可能な索引類である。但し、一部、詩文合集または文集の索引類を含むが、その数は多くない。『曹植文集通検』『嵇康集 文集』『索引』『阮籍集索引』『陶淵明詩文総合索引』『鮑參軍集索引』『文選索引』『李義山文索引』の七種が、純粹な「詩索引」とは異なるものである。これらの索引類の書誌的記述は、いま省略したいと思う。最大の理由は紙数の節約のためであるが、二次的理由としては、索引類の大半が一九七〇年代後半に公刊されたか再刊された比較的新しいものであること、従って入手も比較的容易で、研究機関や研究者の間ではよく知られた索引類であり、書誌的記述はかえって繁瑣にわたる恐れがあるためである。

しかしながら、幾つかの点には触れておかなければならないだろう。第一は、同一の集に対する複数の索引の存在である。これもその数は多くない。

毛詩引得 Harvard-Yenching Institute, 1934. / 東洋文庫, 一九六一。

A Concordance to the Book of Poetry (詩經索引) Wu, Paulus J.T. (吳用彤) Helmut Buske Verlag, Hamburg 1975.

詩經索引 陳宏天・吳嵐 書目文献出版社, 一九八四。

謝靈運詩索引 小西昇 中国書店, 一九八一。

謝靈運詩索引 興膳宏 京都大学中国文学会, 一九八一。

李賀詩引得 R.L. Frick (艾文博) 美国亞洲学会中文資料中心, 一九六九。

李賀詩引得 唐文等 齊魯書社、一九八四。

以上の異版の索引間には、準拠する原本に違いがなければ検索の結果に異同があるはずがない。調査対象について検討してみたところ問題はないので、それぞれ『詩経索引』『謝靈運詩索引』『李賀詩引得』でまとめてある。

第二は、上文で索引類はみなよく知られたものと記したが、なお二、三の補足的な説明が必要であろう。

古詩索引(古詩源古詩選引得) R.L. Hick(文文博) 美国亞洲学会中文資料中心、一九八〇。

本索引は副題に示されているように、沈徳潜の『古詩源』のための索引である。

また『韋応物詩注引得』とあるのは、T.P. Nielson が四部備要本『韋蘇州集』を底本にして作成したもの。『韋蘇州集』にはわずかな校注はあるものの、語注等は付されていないので、この書名はなほだまぎらわしい。美国亞洲学会中文資料中心から一九七六年に刊行されている。さらに索引類の最後の『魚玄機詩一字索引』(小林徹行・田村詔子)はもと手書の私家版であったが、コピー版が一九八三年に汲古書院から発売されている。

索引の配列順は、唐以前については遼欽立『先秦漢魏晉南北朝詩』三冊(北京・中華書局、一九八三)の配列に従い、唐詩は『全唐詩』のそれに準拠する。唐詩に関する配列の原則は、次の「カード調査」でも同じ。

(二) 「カード調査」は、前野直彬博士を代表とする唐詩植物語彙調査プロジェクトの調査成果が土台となっている。同プロジェクトは十年以上活動しているにもかかわらず作業は遅々として進まず、『全唐詩』すべての調査をおえるにはなおまだ時間を要するが、「調査表」にはこれまでの採集カードの成果と、今回補足的に行なったわたしの調査の結果がまとめてある。「索引類」と合わせてほぼ主要な部分は収録したと考えるが、厳密に言えばいまだ中間報告の段階であり、それだけに現段階の「カード調査」のデータには「索引類」のそれと異なる大きな限界がある。それは、後者

が調査対象の語の有無を無の状況まで含めて明らかにするのに対し、前者は、目下の段階では、有の状況しか示さない点である。もちろん、すでに調査済みの詩人名のデータを加えれば「索引類」と同じ結果を示すのであるが、いまそれを整理し詳しく確認する時間的余裕がない。しかしながら、「調査表」所掲の詩人については対象語すべてに関する確認作業がすんでいる。

「調査表」の欄外に、わずかな注記のほか、「枯木」と「枯樹」のデータが載せてある。この二語が今回の調査対象語、とりわけ「老木」「老樹」とイメージ的に近いと思われるので、参考までに採集結果を付記したものである。但し、調査対象語の四語をもたず、「枯木」「枯樹」しか見えない詩人は「調査表」から省略してある。

二

「調査表」で明らかかなように、唐詩に限定して「古木」と他の三語を比べると、「古木」の八六例（『王昌齡詩索引』の一例が、王維の「過香積寺」05938と重複し、他に李商隱文の一例が記載されているので、それらを除外する）に対して三語の合計が六〇例、その比率は約一対〇・七であるところから、詩語としては「古木」が一般的であると結論してよいであろう。「古木」以外の他の三語の中では「古樹」の占める割合が大きく、「古木」と「古樹」を合計すると全体の約九割に達する。相対的に「老木」「老樹」の用例は少なく、唐代までの詩人にこの二語が愛用されていたとは、とうてい言い難い。特に「老木」に至っては、現在のところ中唐の鮑溶の「山中冬思」（『山中冬思』二首其一、25814）中の一例——「老木 寒くして更に瘦せ／陰雲 晴れて亦た低し」——と、晩唐の章莊の次の一例を見るに止まる。

誰謂傷心畫不成 誰か謂う 傷心は画きて成らず

畫人心逐世人情 画人の心は世人の情を逐うと

君看六幅南朝事 君看よ 六幅南朝の事

老木寒雲滿故城 老木 寒雲 故城に満つ

金陵圖 (38898)

六朝の古都南京のありさまを描いた「金陵の図」に付された題画詩であろうが、韋荘の眼にした六幅の金陵図——おそらく、六朝を朝代ごとに一幅の絵にしたたもの——には、そこかしこに群がり生える年老いた木々とたなびく雲の合間から金陵城の樓閣や街並みかのぞく、といった絵が描いてあったのではなからうか。その絵が荒廢の古都のありさまを写し出したものか、古都の幽静閑寂の雰囲氣を描くだけのものではなかつたのか——少なくともこの場合、繁華のさまを描いた絵ではあるまい——實際はどうであつた明瞭でないが、韋荘の眼には画中の金陵がまぎれもなく荒廢の都と映り、これこそまさしく画人が「傷心」を「画き」出したもの、と考えられたのである。「傷心」すなわち悲しみの内容は、金陵でくりひろげられた人の世の興亡、うたかたの夢と消えた六朝金陵の榮華、そして「老木」と「寒雲」のみこの旧都の荒廢と空しさ等に対する悲しみであろう。唐代の金陵南京の荒廢ぶりは詩文などでよく知られているが、すでに活氣を失つて久しい旧都を写すのに、確かに「老いたる木」のイメージが最も効果的でふさわしい。後述することく、「老木」の基本的なイメージは、衰退と老殘、生命の末期のイメージだからである。

因みに、唐王朝の没落を實際に見ることになった韋荘が、「金陵の図」に描かれた「南朝」の運命と唐王朝のそれとを重複させて見たと推測してまちがいはなからう。たとい作詩の時期と王朝の終焉とが前後していたにせよ、かれの生涯の早くにもはや唐王朝の命運が尽きかけていたのは、誰の眼にも明らかであつた。このような韋荘の作品にわずかに二例中の「老木」の一つの例を見出すことは、はなはだ象徴的であると言わざるをえない。

「老木」と「老樹」が量的にも少なく、かつ初出の時期も遅い——「調査表」では岑参の二例が先に載せてあるが、

「揚雄の草玄台」〔揚雄草玄臺〕09559 別集では古樹〕「江上にて風雨に阻まる」〔江上阻風雨〕009573)とも大曆二年(七六七)ころの作品と推定されるの⁽⁴⁾に對し、杜甫の「奉先の劉少府の新たに画ける山水の障の歌」〔奉先劉少府新畫山水障歌〕10535)は天寶十四載(七五五)の作であるので、「老樹」の用例は杜甫の詩をもって嚆矢とする——の⁽⁴⁾に比べると、

「古木」と「古樹」の二語の使用は唐以前にさかのぼる。そして、二語の中では「古樹」の方が古い。

もともとこの二語(そして「老木」「老樹」とも)は、古代の詩人たちから無視されていたかに見える。「調査表」の示すように、先秦・漢魏の時期の詩には全く見出せない。詩作品の中に見えないだけではなく、実は散文の作品中にもほとんど用いられることがなかった。たまたま手近にある『尚書通檢』『四書索引』『莊子引得』『等數種の索引類を調べても、調査対象の言葉を全く載せていない。採集しえた最も早い例は、『佩文韻府』から拾った漢・焦延壽撰『易林』(夬卦)の「鳥有り来たり飛びて、古樹に集まる」の漢代の例である。そして、第二番目の例が「調査表」の『鮑參軍集索引』に載せる一例で、「大雷岸に登りて妹に与うる書」〔登大雷岸與妹書〕に次のように見える。

……寒蓬 夕に巻き、古樹、雲平らかなり。旋風 四⁽⁵⁾もに起り、思鳥 群れて帰る。……

劉宋の元嘉十六年(四三九)の秋、江州の臨川王劉義慶のもとに赴く途中の鮑照が、大雷(安徽省望江県)の長江の岸辺に到ったときの眺めを妹の鮑令暉に書き送った書信の一節である。⁽⁵⁾この文章は「書」であるとはいえ、すでに小尾郊一博士によって指摘されているごとく、「文体からみると、ほとんど『賦』と変りはない」⁽⁶⁾。従って、「古樹」の語がもともと、通常の散文体⁽⁶⁾に用いられる文章語とは異なる修辭文学の用語として生まれた、と結論してよいのではなからうか。鮑照の「古樹」は、秋の夕暮の蕭条たる状況を写すイメージであり、同時に大雷のあたりが古くからの渡津であることをも暗示する。

「古樹」がはっきりと詩語として用いられるのは、梁の簡文帝蕭綱からである。

古樹横臨沼 新藤上挂樓 古樹 横たわりて沼に臨み 新藤 上りて楼に挂る

山池詩(梁二二)

古樹無枝葉 荒郊多野煙 古樹 枝葉無く 荒郊 野煙多し

往虎窟山寺詩(同)

弱枝生古樹 舊石染新流 弱枝 古樹に生じ 旧石 新流に染まる

登琴臺詩(梁二二)

簡文帝以後、唐以前の状況は、北周・王褒の「関に入りて故人別る詩」(「入關故人別詩」北周一)、同・庾信の「老子廟に至りて詔に応ずる詩」(「至老子廟應詔詩」北周二)の二例、陳の張正見の「虜亭に征き新安王を送りて令に応ずる詩」(「征虜亭送新安王應令詩」陳三。また徐陵の作としても見える。陳五)と同時代の江総の「隴頭の水」(「隴頭水」二首其一、陳七)の各一例、隋の盧思道の「梁城に遊ぶ詩」(「遊梁城詩」隋一)、楊素の「山齋に独坐して薛内史に贈る詩」(「山齋獨坐贈薛内史」二首其一、隋四)の二例の、計六例を数えるに過ぎない。

唐詩における状況については「調査表」に載せるごとくであるが、その劈頭を飾るのは太宗の「山閣の晩秋」(「山閣晩秋」00039)である。

古石衣新苔 新巢封古樹 古石は新苔を衣て 新巢は古樹を封ず

イメージ、詩の雰囲気とも簡文帝の「山池詩」に似て、六朝風の味わいをもつ。

一方、「古樹」に対して「古木」の初出は、やはり六朝期ではあるが、時代はやや降って陳の時期である。「調査表」の『古詩索引』に見える何胥の「使を被りて関を出ずる詩」(「被使出關詩」陳六)がそれである。

出關登隴坂 回首望秦川 関を出でて隴坂を登り 首を回らして秦川を望む

絳水通西晉 機橋指北燕 絳水は西晉に通じ 機橋は北燕を指す

奔流下激石 古木上參天 奔流 下って石に激し 古木 上って天に參わる

鶯啼落春後 雁度在秋前 鶯の啼くは春後に落ち 雁の度は秋前に在り

平生屢此別 腸斷自催年 平生 此の別れを屢しばす 腸断たれて自ずから年を催す

何胥の伝記資料がきわめて乏しいために、いま「使」の内容など具体的な事情は判然としないが、詩句から判断するところ、公務を帯びた何胥が隴坂（隴山）の関を出て西に赴くときの作品と解釈される。隴山は中原から西域に出る際に最初に遭遇する難処で、漢代以来の伝統的な楽府（漢横吹曲）に「隴頭」「隴頭吟」「隴頭水」などの歌謡があるように、昔から知られた関山である。険しい地形を利用して外敵を禦ぐための関が設けられるのは、函谷関、潼関などの場合と変らない。それらはいずれも時代こそ変わるものの、幾代にもわたって関の機能をはたしてきた名だたる関であり、歴史的な古関である。何胥の「古木」のイメージも、隴山の険しい地理的条件と歴史的な古さを内包していることは言うまでもない。上文で「古樹」の用例として詩題だけをあげた江総の「隴頭水」に、

驚湍自湧沸 古樹多摧折 驚湍 自ずから湧沸し 古樹 多く摧け折れたり

とうたわれている「古樹」は朽ちた枯樹であるが、何胥の「古木」はいまなお生氣を保って天をつく勢いのある木々である。

江総の詩にはほかに「古木」の例もある。

閒階薜宿薺 古木斷懸蘿 閒階 宿薺を薺り 古木 懸蘿を断つ

「卞山の楚廟の詩」（「卞山楚廟詩」陳八）に見える「古木」で、太湖のほとりの卞山にある古い楚廟の閑雅の趣きを写すものであるが、これは隋の劉斌の「孔子廟に謁すに和する詩」（「和謁孔子廟詩」隋六）の

寂寞荒塔暮 摧殘古木秋 寂寞たり 荒塔の暮れ 摧殘たり 古木の秋

とともに、年へた古廟の描写に「古木」のイメージが用いられた最初の例である。梁の簡文帝の「虎窟山寺に往く詩」に見える「古樹」をも含めて、六朝期の「古木」「古樹」のほぼ最初の用例が寺廟と結びついていることに注意しておきたい。

「古木」に関する限り、何胥から劉斌に至るわずか三例のみが唐以前における用例のすべてである。その唐人による初めての例が、本文の冒頭にあげた太宗李世民的例であった。太宗のあと、魏徵・駱賓王・陳子昂と続くのであるが、これに「古樹」の王勃を加えても、初唐期の詩ではまだ「古木」「古樹」のイメージが一般的ではなかったことを示している。それぞれのイメージの伝えるところは以下のごとくである。

日落豊碑暗 風來古木吟 日は落ち 豊碑暗く 風來たりて 古木吟ず

過張平子墓 (04145)

荒郊疏古木 寒隧積陳荻 荒郊 古木まぼら疏に 寒隧 陳荻積む

丹陽刺史挽詞三首其三 (04212)

層陰籠古木 窮色變寒蕪 層陰 古木を籠め 窮色 寒蕪を変す

久戍邊城有懷京邑 (04252)

駱賓王の三例であるが、後漢の張衡の墓（河南省南陽県）と丹陽刺史の墓葬の地をうたう二例と、西域の辺塞での作一例であり、いずれも荒涼としてものがない景と情とを伝える「古木」のイメージである。郊外のさびしい丘陵地帯にあって、しかも幾代にもわたって死者の葬られるのがふつうの墓地と、古来数知れない人びとが辛い悲しみを嘗め、中国の苦悩の歴史とともに記憶されている辺塞と、いずれも「古木」のイメージがよく似合う。これらの場所と「古木」

のイメージの親近性は、悠久の時間的条件、荒涼辺陬の地理的条件において、古関の場合に共通する。

王勃の「古樹」の一例は、「境を出でて山に遊ぶ」(「出境遊山」)二首のその一(03519)。

洞晚秋泉冷 巖朝古樹新 洞の晩れ 秋泉冷かに 巖の朝あした 古樹新たなり

『全唐詩』の題下の校注に「一本《玄武山の道君廟に題す》に作る」とあるところからすれば、上述の江総・劉斌の「古木」の場合に同じく、古廟に配された「古樹」のイメージということになる。校注のごとく道君廟であるかどうかは別として、「宮闕 雲間に近く／江山 物外に臨む／玉壇 暮夜に棲れば／珠洞に秋陰結ぼれたり」(その二)と詠じているので、奥深い山の高みにたつ祠廟または道観を訪れての作であることに疑いはない。

陳子昂の「白帝城懷古」(04450)の「古木」は、いわゆる古跡に用いられている例で、上に見てきた古関・古廟の類とイメージの内容は変わらない。

古木生雲際 孤帆出霧中 古木 雲際に生じ 孤帆 霧中より出ず

明の蔣一葵が『唐詩選』の評で「深秀」と評した一聯であるが、「古木」のイメージから見れば、とりたてて新味はない。むしろ興味深いのは、かれのほかの作品に見える「古木」と「古樹」のイメージである。

野戍荒煙斷 深山古木平 野戍 荒煙断え 深山 古木平らかなり

晩次樂郷縣 (04418)

古樹蒼煙斷 虛亭白露寒 古樹 蒼煙断え 虚亭 白露寒し

秋日遇荊州府崔兵曹使宴并序 (04438)

古樹連雲密 交峯入浪浮 古樹 雲に連なりて密に 交峯 浪に入りて浮かぶ

入峭峽安居谿伐木谿源幽邃林嶺相映有奇致焉 (04463)

樂郷県は現在の湖北省荊門県の北に位置し、長江の沿岸にあった県、格別とりたてていうほどの土地でもない。「野成」もまた名も知れない片田舎のとりでであろう。荊州府の崔兵曹の宴がどこで開かれたか定かでないが、「序」に「華堂を顧れば晚れんと欲す」とあり、詩に「虚亭」（本集は「虚庭」）の語が見えるので、おそらくは鬱蒼と樹木にかこまれた大邸宅の庭園の中であろうか。峭峽の安居谿は、陳子昂の故郷である四川省射洪県の近く、遂寧県々境を流れる安居水の谿谷と推定される。現在も安居坝の地名ののこる付近で作られた作品であろう。いま陳子昂の例が興味深いと記したのは、これらの場所がいずれも特に歴史的に有名な古跡であるとか、寺廟のごとく古びた木々と特別に関係の深いところではなく、いわば誰しもが目にしうるふつうの場所——荊州府の崔兵曹の庭園にしたところで、梁の簡文帝の山池、隋の楊素の山齋とは異なった、たかだか兵曹参軍の住む庭園である——に生えている木々だからである。「……谿源幽邃、林嶺相映じて、奇致有り」とあるように、人びとに無視されていた古木と古樹がそれ自体で存在感を示し、詩人の詩的感興を喚起している点に注目したのである。言うなれば、陳子昂こそ「古木」と「古樹」のイメージのあらたな発見者であった。

三

「古木」と「古樹」、そして「老木」と「老樹」が、詩のイメージとして成熟し、詩人たちに好んで用いられるようになるのは、盛唐期以降である。とりわけ、劉長卿の「古木」一八例と「古樹」二例の多用が目だつが、盛唐のほかの詩人、王維・李白・杜甫・高適等がこれらの言葉——詩語——に関心を向けていることに注目しておきたい。しかしながら、なんと言っても詩人の数の多さとヴァリエティから言えば、中晩唐期に「古木」などのイメージが完全に定着したと結論することができらるだろう。たとえば、

古樹枝柯少 枯來復幾春 古樹 枝柯少なく 枯れ来りて復た幾春ぞ

張籍・古樹 (20224)

古樹欹斜臨古道 古樹 欹斜して古道に臨み

枝不生花復生草 枝は花を生ぜず 復た草を生ず

徐凝・古樹 (25130)

のように、「古樹」そのものを題材とする作品まで現われてくる。もとより、「古木」等のイメージが六朝から盛唐にかけても主流はそうであったように、古関や古廟の悠久の時の流れや荒廃の感覚、寺観の静謐と清浄の感覚——たとえば王維の「香積寺に過る」〔「過香積寺」05958〕の「古木 人径無く／深山 何処の鐘ぞ」のような——辺境の寂寥、庭園・山野の雅趣等々を伝えるはたらきをし、それらのイメージが用いられる場所も多様化すると同時に広まって来たのであるが、中晩唐期のそれらのイメージはより鮮明になり、かつ詩の背景から前面に出て来たということである。かつて陳子昂が発見した「古木」「古樹」のあらたな魅力を、中晩唐の詩人たちはより随処に見出すのである。

門徑俯清溪 茅簷古木齊 門徑 清溪に俯し 茅簷 古木に齊し

裴度・溪居 (17772)

黄葉覆溪橋 荒村唯古木 黄葉 溪橋を覆い 荒村 唯だ古木のみ

柳宗元・秋曉行南谷經荒村 (18513)

思うに、「古木」などの樹木のイメージがこのように唐代中期以降の詩人に愛されるようになったのは、絵画のイメージの進展と無縁ではあるまい。

……この両名家（韋僊と張通——筆者注）は中唐の作家とおもわれるが、その頃に樹石のみを山水から切り離し、ず

っと身近に視線をあてて描く傾向が、画家たちのあいだで爆発的に高まったのである。これは、花咲く樹々というよりは、より幽致ある老樹への関心、また奇石愛好熱とならんで抬頭した奇異な岩石のふくむ象徴への志向、この両者が画家に樹石図を作る意向をつのらせたとみられよう。つまり、盛唐の豪壮華麗なるもの、そして権威的な壮大なものから身を退いて、画家がはじめて自己自身にかえり始めたことではなかったか。⁽¹⁰⁾

この長廣敏雄氏の指摘する「幽致ある老樹への関心」の詩における反映が、とりもなおさず上文で検討してきた「古木」などのイメージの成長と増加であったのである。

さらに付言するならば、王維に始まると伝えられる南宗画——「渲淡」の法と呼ばれる水墨による山水画——の発達によって、華やかな花樹よりは濃淡の水墨で描くに適した古樹・老樹が、人びとの関心をよんだことも忘れてはならない。

すでに予定の紙数に達したが、検討すべきことがらはまだ少なからず残っている。いまはただ、問題点と一応の結論のみを以下に記そう。

第一に、「古木」「古樹」と「老木」「老樹」のイメージの相異という問題である。言い換れば、「古」と「老」との違いということになるが、両者は時として重なることはあっても、「古」が永遠の時の流れを意味する歴史感覚をもつ言葉であるのに対して、「老」は時間の限定された生命感覚の言葉といえることができる。「古」なるものは、これまでもちつづけてきた生命あるいは価値を、これからも永遠にもちつづけると人びとに意識され、一方、「老」なるものは、これまで持続した長い生命あるいは価値に一定の尊敬は受けながらも、その生命あるいは価値の消滅に近づいている状態をいうと考えられてきた、と考えられる。このことは、「古木」「古樹」のイメージの愛好と、相対的に「老木」「老樹」の不人気に関わっているのであろう。

第二の問題は、「古木」と「古樹」の違い——ひいては「老木」と「老樹」の相異と同質の問題——であり、「木」と「樹」のイメージの違いという問題におきかえることかできる。これまた第一の問題同様、重複する部分の多いことを前提として結論を急げば、「木」は樹木の総体、また樹木の樹木たる特性を抽象的かつ概念的にとらえるときに用いられる言葉で、「樹」は逆に個々具体的な生命体である樹木が意識されている言葉である。たとえば、個々の種類の樹木を呼ぶとき、松樹・柳樹・桃樹等の言い方が一般的であるのに対して、松木・柳木・桃木等の呼称は一般的でない。もちろん、「木」が個々特定の樹木について用いられることは否定しないが、この語が喚起するイメージがそうであるという意味である。このことを考えるのに好個の例が杜甫の詩句に見える。

岸疏開關水 木雜今古樹 岸は疏す 開關の水 木は雜う 今古の樹

宿花石戍 (10879)

総体としての「木」が「今樹」「古樹」のいりまじったもの、という表現であり、「今樹」「古樹」は具象性のある個々のたち木が意識されていると解釈できるのである。

第三の問題は、第二のそれと関連する。つまり、「古樹」と「古木」はいかなる種類の樹木をさすかという問題で、これにはイメージの用いられている場所、詩人の状況、植物の分布等さまざまな要素がからんでくるに相違ない。この点については早急な結論を下すまでも至っていないが、墓地における松柏の類、寺廟における同じく松柏それに杉檜の類など、一般に場所と近しい関係にある樹木は少なくない。絵画のイメージと深くかかわること、「古+□」という表現とも深い関連性のあることは論をまたない。

これらの諸問題については、再論の機会に譲りたい。

注

- (1) 「入潼關」を大業十三年の作とするのは、たとえば呉雲・冀宇編輯校注『唐太宗集』（陝西人民出版社、一九八六）。但し、本詩の詩題、制作年などに問題があることは、以下の本文を参照。
- (2) 詩題の下に付す番号は、『唐代の詩篇』（平岡武夫編、京都大学人文科学研究所、一九六四・一九六五）の詩篇番号。以下同。
- (3) 中島敏夫『唐詩選』上（学習研究社・中国の古典27、一九八二）参照。
- (4) 陳鉄民・侯忠義校注『岑參集校注』（上海古籍出版社、一九八一）参照。
- (5) 錢仲聯増補集説校『鮑參軍集注』（古典文学出版社、一九五八。また、修訂版が、上海古籍出版社、一九八〇）参照。
- (6) 小屋郊一『中国文学に現われた自然と自然観』（岩波書店、一九六二）の第二章「南朝文学に現われた自然と自然観」第二節「山水をのべる小品文」。
- (7) 唐以前の詩については、『唐代の詩篇』番号に代わるものとして、遼欽立『先秦漢魏晉南北朝詩』の収録巻数を示す。「梁二一」は梁詩卷二十一に該当の詩が収められていることを示す。以下同。
- (8) この詩の丹陽が建康（江蘇省南京市）をさすのか宣城（安徽省宣城県）をさすのかについては、清・陳熙晉箋注『駱臨海集箋注』卷三に考証がある。いずれが是ともいえないというのが結論であるが、いずれにせよ「百齡 倏忽たるを嗟き／一旦 山の阿くまに向う」などの句から、郊外の丘陵にある墓地のようすが詠じられていることは明らかである。
- (9) 『箋釈唐詩選』明・李攀龍撰、唐汝詢注、蔣一葵直解に見える。同書は万曆年間に刊行された、いわゆる『唐詩選』の最も古い版本である。
- (10) 張彦遠著・長廣敏雄訳注『歴代名画記1』（平凡社・東洋文庫、一九七七）の卷一「山水・樹石を画くことを論ず」の《論説》、八七ページ。

古 木 調 査 表

1989・2・1作成

索引類	古 木	古 樹	老 木	老 樹	
毛詩引得	—	—	—	—	
楚辭引得	—	—	—	—	枯樹 1
全漢詩引得	—	—	—	—	
全三国詩引得	—	—	—	—	枯樹 1
全晋詩引得	—	—	—	—	
齊詩引得	—	—	—	—	
北魏詩引得	—	—	—	—	
北齊詩引得	—	—	—	—	
曹植文集通檢	—	—	—	—	枯木 4 (文ノミ)
嵇康集“詩”索引	—	—	—	—	
嵇康集“文集”索引	—	—	—	—	
阮籍集索引	—	—	—	—	
陸機詩索引	—	—	—	—	
陶淵明詩文総合索引	—	—	—	—	
謝靈運詩索引	—	—	—	—	
鮑參軍集索引	—	1	—	—	「書」ノ語
謝宣城詩一字索引	—	—	—	—	
文選索引	—	—	—	—	枯木5(内曹植1)
玉台新詠索引	—	—	—	—	枯樹 1
古詩索引	1	—	—	—	何胥：被使出関
宋之間詩索引	—	—	—	—	
王勃詩一字索引	—	1	—	—	又「序」古樹 1
杜審言詩一字索引	—	—	—	—	
駱賓王詩一字索引	3	—	—	—	
陳子昂詩索引	2	2	—	—	
沈佺期詩索引	—	—	—	—	
王維詩索引	4	—	—	—	
王昌齡詩索引	1 (王維詩)	—	—	—	枯木 1 枯樹 1
孟浩然詩索引	—	—	—	—	
李白歌詩索引	4	3	—	—	枯樹 1
韋応物詩注引得	1	—	—	—	枯樹 1
岑參歌詩索引	1	1 *	—	1	*全唐詩作老樹
杜詩引得	2	1 (今古樹1)	—	5	枯木 1 枯樹 1
錢起詩索引	1	4	—	—	枯木 1
韓愈歌詩索引	—	—	—	2	

索引類(続)	古木	古樹	老木	老樹	
柳宗元歌詩索引	3	—	—	—	
孟郊詩索引	3	3	—	—	
張籍歌詩索引	—	1	—	—	枯樹1
李賀詩引得	—	—	—	1	
杜牧詩索引	1	—	—	—	
李商隱詩索引	2	—	—	1	
李義山文索引	1	—	—	—	枯木3 枯樹2
温庭筠歌詩索引	—	5	—	—	
皮日休詩索引	3	—	—	—	
魚玄機詩一字索引	—	—	—	—	
カード調査	古木	古樹	老木	老樹	
太宗	1	1	—	—	昔樹1
魏徵	1	—	—	—	
王冷然	1	—	—	—	
劉長卿	18	2	—	—	
高適	1	1	—	—	
皇甫冉	1	—	—	—	
顧況	1	—	—	—	枯樹1
耿湜	1	3	—	—	
李端	3	3	—	—	
戎昱	—	1	—	—	
竇常	—	—	—	1	
崔子向	1	—	—	—	
武元衡	1	1	—	—	
裴度	1	—	—	—	
權德輿	—	1	—	—	
劉禹錫	2	—(1*)	—	—	枯木1 枯樹2
白居易	1	—	—	1	枯樹1
徐凝	—	—	—	—	
鮑溶	—	—	1	—	
許渾	1	—	—	—	
馬戴	2	1	—	—	
李質	1	—	—	—	
李羣玉	1	—	—	—	
賈島	1	—	—	—	枯樹1
李山甫	2	—	—	—	
李咸用	—	1	—	—	

カード調査 (続)	古 木	古 樹	老 木	老 樹	
方 干	1	1	—	1	枯木 1
羅 隱	—	—	—	1	
唐彦謙	—	—	—	2	
鄭 谷	1	—	—	1	
韓 偓	2	—	—	—	
吳 融	1	—	—	—	
杜荀鶴	2	1	—	—	
韋 莊	—	—	1	—	
黄 滔	2	1	—	—	
崔道融	—	1	—	—	
曹 松	1	—	—	—	
薛 濤	2	—	—	—	
靈 一	1	—	—	—	
処 默	1	—	—	—	

注 劉禹錫 全唐詩：古道，一作古樹。

○ 本表の資料・構成等については，本文一章を参照されたい。